

〔A部門〕

第16回「東書教育賞」を受賞された先生方に、心からお祝いを申し上げます。

この「東書教育賞」は、東京書籍の創業75周年を記念して創設されたもので、昭和60年1月に第一回の募集要項が発表されました。その後、この賞についての先生方の関心も年ごとに高まりまして、今回のA部門「教科指導や学校経営に関する実践部門」には、小学校114編、中学校63編、合計177編という多数の論文が応募されております。

今回の課題は「生き生きと学ぶ子どもを育てる教育実践」となっております。これは小学校、中学校におきまして非常に大切な課題でございます。私どもは、創意工夫を加えた実践が具体的に記述された論文が集まることを期待したわけでございます。審査の基準としましては、次の三つがあげられます。

- (1) 実践の結果に基づいて子どもの姿が具体的に記述され論じられているか。(実践性)
- (2) 実践のなかにどのような創意工夫がみられるか。(創意性)
- (3) 特殊な実践ではなく、だれにでも応用できるような一般化への手がかりがあるか。また、子どもの発達段階や適時性への配慮が十分になされているか。(一般性)

その他、論文としての体裁が整っているか、応募規定に従っているかなどの点を、慎重に審査させていただきました。今回の応募論文では、新しい学力観に立った指導が、すべての教科にわたってさらに工夫され、強力に進められていることが読み取れました。また、新しい教育課程の内容を先取りする形での実践報告が数多くありました。とくに「総合的な学習」に関する実践が著しく増え、39編と、応募論文の2割にあっております。このよ

うに実践の課題が多岐にわたってきていることは、注目すべきことだと言えます。論文を拝読いたしまして、先生方の日常の学習指導に対するご熱心さと情熱に打たれ、いかにご苦労が多いかが分ると同時に、優劣のつけ難い力作を審査することの難しさを痛感いたしました。

それらの中から審査の結果、A部門小学校の部で最優秀賞1編、優秀賞2編、特別賞1編、奨励賞4編の計8編を、中学校の部では、最優秀賞1編、優秀賞2編、奨励賞3編の計6編を選出いたしました。

小学校の部の最優秀賞は、愛知県三好町立北部小学校の石川いずみ先生の「日常生活習慣を意識させる指導法」でした。

この実践は、保健の授業を通して、たんに身体のしくみや働きを理解させるだけでなく、日常生活習慣を進んで改めるところまで、子どもの意識と行動を変えていくことに成功した例です。

現代の子どもたちは、戸外での活動が減り、夜型の生活や偏食により、生活リズムが乱れ、健康な生活がそこなわれている実態が少なくありません。そこで、本実践では、健康な生活の知識を深め、さらに自分の健康は自分でつくろうとする意欲を育てることを目標として、非常にアイデアに富む授業を展開されています。授業では、一貫して子どもが発見、驚き、感動や満足が得られるような指導の工夫がいくつも見られます。

手づくりの模型を使った演示や、食物繊維の効果の実験、個々人別の点検カード、さらには高齢者との交流による深まり等々の活動を通じて、知識的な理解とともに、自らの健康を考える大切さや意欲が、自然に高められていく様子が示されています。

ここでは、高度なメディア教材は使われてなく、黒板とチョークを主に、簡単な模型や短冊といった素朴な教具が用いられているだけです。しかし、それらの一つ一つが子どもたちに鮮やかな実感と驚きとを与える効果があり、すぐれた指導計画や先生の熱意と相まって、大きな教育効果をあげております。

次に優秀賞のひとつは、福岡県福岡市立有田小学校の馬場真弓先生の「地域のよさから生まれた思いを表現し発信する図画工作の実践」です。

これは、総合的学習で得た体験、知識を図工の教科学習へ転移させた実践です。

造形活動は、本来子ども達の心の中からわき出る表現欲求を中心に展開されるべきものというの、図工教育に求められる基本的なことです。しかし、実際にはこれはなかなかできることではありません。

本実践では、ユニークな「個人カルテ」や「図工ノート」で子ども一人一人の実態を的確につかみ、ポートフォリオ評価によって表現意欲の成長を見取りつつ、主体的な学習をたんねんに進めています。

また、もう一つの特色として、理科や社会、ここでは学校近辺の室見川の自然や環境の学習と結びつけた校外活動をすすめ、地域に密着したカリキュラム、カルテを組み、総合的学習のなかで図工の表現力や感性を高めるのに成功しています。

児童の感性や発想の多様性を大事にしつつ、それらを作品等の具体的なかたちに結実させるまでの、先生の支援の仕方がたくみであるといえます。

他のひとつの優秀賞は、鳥根県松江市立本庄小学校の仙田浩志先生を代表とする「日韓の相互理解を図る歴史教材の開発とその実践 6年朝鮮通信使」です。

これは、日本と韓国との国交の歴史、とくに秀吉の時代から江戸時代の朝鮮通信使の歴史的、文化的な意義を、現地取材と韓国教師

の支援とにより教材化、実践したものです。適正な教材観に基づくテーマの選定に立って、教材の収集、研究のための日韓教師の交流を深めて、効果的な資料の活用に成功しています。国際理解教育とくに視野を広げた国際間での計画は学校訪問、教科書比較などダイナミックであります。

資料の適切な提示で、児童の問題意識を盛り上げていく手法はすばらしく、他の授業であっても模範となるものと思われます。

ただ、小学校6年生としては、一般的に見てややレベルが高いかと思われるところがあり、もう少し個々の子ども達の反応の変化、成長の過程が記録されていれば、さらに一般化の参考として価値が高くなったと考えます。

以上3編の実践のほかにも、今回、特別賞として北海道豊浦町立豊浦小学校の菊池征児校長先生の「有珠山噴火で避難した子どもたちを受け入れた学校経営」が選ばれました。これは噴火の避難生活という異常な環境に置かれた児童たちに、人間関係の上からも健康的な日々を送れるようになってもらうための、さまざまな危機管理に対応した学校・学級経営の実践であります。

校長先生は「人間遊舎楽習構想」という新語をつくられたことに示されるように、まず経営の理念を確立し、教師たちもまたそれに応えた創造的な活動を展開した実践です。校長先生のリーダーシップも強く発揮され、保護者との協調が図られ、被災児童も含めた三者のかかわりが円滑にすすまれています。こうした思いやりにも富んだ努力の結果、児童の幸福感まで伝わる熱情あふれるレポートであります。

非日常的な状況下での学校経営の実践であるという点で、特別賞とさせていただきます。

いずれの論文を拝見いたしましても、現場の先生方一人一人が、今の子どもたちに、し

しっかりした基礎・基本の学力を身につけさせることにいかにご苦心なさっているか、実践がどれほどご苦労であるかということが痛感させられます。また、それに加えて、先生方が現実に子どもたちを前にして、いろいろと創意工夫をしてくださっているということです。このことがどの論文にも、はっきりと読み取ることができまして、一つの大きな成果ではないかと感じた次第でございます。

概要は以上でございますが、申すまでもなく教育課程の基準も改正され、新しい学習指導要領のもとに、どの学校にも特色のある教育の実践、特色のある学校づくりということが、大きく期待されているわけでございます。どうか、この東書教育賞の論文に応募された経験を生かして、日ごろの実践にあたっていただきたいと思っております。

いま、世をあげて教育改革ということが言われ、いろいろな提言や施策が出されているわけでございますが、こういう論文を拝見いたしましたして、私がつねに感じますことは、これからの教育実践の第一線をになっていただく先生方に、しっかりした考え方を持っていただきたい、なんでこういうことを子どもたちに今やらせるのかということに、自分なりの哲学を持って毎日毎日の学習にあたっていただきたい、ということです。

戦後教育云々と言われますけれども、これからの教育改革は、戦後云々ではなく、「戦後後」の教育のあり方をつくっていかなくてはならない。これが今度の教育改革のねらいであり、願いでなければならぬと思っております。

先生方の一層のご活躍をお願いいたします。

(多湖 輝)

〔B部門〕

第16回東書教育賞B部門に受賞されました先生方、まことにおめでとうございます。すばらしい論文をお寄せいただきまして、ありがとうございました。

今回はすこしB部門の応募論文が減りまして、いささか残念に思いますが、小学校では国語、社会が減り、総合的学習が増えております。中学校では国語、社会が増えているという傾向でありました。最終審査には小学校6編、中学校6編が残りましたが、小学校では5編が総合的学習で、中学校ではすべてが教科でした。B部門の審査では、A部門の審査の視点に加えて、コンピュータの特性を生かした実践であるかということ、それからその利用の輪が広がっていくような実践であるかという点を基準にしているわけでございます。

今回、最終審査の対象となった12編のうち11編が、インターネットとかホームページあるいはテレビ会議といったICT(情報通信技術)を活用した実践でありまして、時代を反映しているということを感じました。これにはその背景がありまして、この1年でも文教政策が情報関係で動いております。昨年4月にG8の教育大臣フォーラムが日本でありましたが、先進国の間で、ICTとか遠隔教育が今後は大事であるということが話され、国策というより世界策となっております。また、九州沖縄サミットでのIT革命、それから国会で決まりましたIT基本法、こうしたなかでも情報教育とか、情報技術を教育に活用することが重要であるということが含まれています。また、高校では、情報が選択必修になりますので、その指導者の先生の養成ということで、教員養成大学での課程認定が進んでいますし、コンピュータのコーディネーターの研修とか、Webのインターネット教材の開発への援助というような国策もさかんでございます。高速ネットワークに補正予算

がつきまして、全国の学校4万校の約1割近くが高速ネットワークでつながっていくことになります。ただいまでは、おそらく6割、今年末ではほとんど全ての学校がインターネットで接続されるでしょう。そういう状況を反映しているものと思いました。

さて、今回B部門で最優秀賞になりました論文は、愛知県小牧市立篠岡小学校の丹羽敦先生の「インターネットを情報メディアとして活用し、世界を広げる」という実践であります。

インターネットというのはたいへん便利な情報源で、百科事典のようにいろいろな情報をとってこれることができます。それだけではなく、情報を発信する手段でもあるし、人と人との間の情報のやりとりをする手段として使える。そういう手段を通して、いろいろな人との接触をしながら学習を深めていき、世界が広がる。この実践では、障害をもった方との心のこもった交流がたいへん感動的でありました。まず始めは、この小学校の5年1組の生徒が、ホームページを立ち上げ、学級日記を公開しようというところから始まります。相手は父母とか地域の人や、ほかの小学校の仲間などです。自己紹介をしたり、行事の報告をしたり、リレー物語とかだんだんに内容を広げていきます。すると外からメールがくる。地域の人や卒業生から、学校の思い出とか、“がんばれ”とかです。それで「ああ、わたしたちのページを見てくれている人がいるのだ。」ということで、それに対して返事を出す。このへんまではホームページを作り、メールがきて、返事を出すという程度のことです。段々とこれが積極的になっていきまして、自分たちで他の学校のホームページを見て、こちらから問いかけていこうということになる。そして、この小牧市の学校から岩手県北上市の黒岩小学校へ、学校紹介や地域の紹介などをする。さらに東京都世田谷区の松丘小学校、これは大都市の学校で、生徒

一人一人がページをもっている。ここのメール交換のやりとりが始まります。こういうふうに総合的学習の感じで相互の交流をしているなかで、しだいに教科の学習に広がっていきます。たとえば社会科の勉強をしようということで、過疎や過密のことを調べることになる。東京と岩手ですから、いろいろなことを質問して、分かる。バスが1日に3本くらいしか走らないとか、6人の大家族でくらしているとか、また「大都会に住みたいとは思わない。」ことを聞く。住みたいだろうと思っていたが、そうではないということが分かって驚く。こうやって、教科書なんかではできない学習を、子どもたちがじかに相手と接触しながらしていく。

これが進んで、こんどは福祉学習をするということになります。福祉体験をホームページにのせる。すると会津若松の障害をもつ方からメールが入ってきます。磯部さんという方で、重度の脳性まひであるとのことで、生徒のほうもボランティアに関心がありますということで、いろいろと聞いていきます。このときは、もう2年目で、6年生になっています。そのうち、磯部さんが生徒たちに問いかけます。「ボランティアというけれど、わたしたちは、同情からあれこれしてあげるといってはいけません、お手伝いさせていただくというのが、本当のボランティアではないかと思うが、皆さんはどう思いますか。」という問いかけです。それを生徒がまじめに受けて議論をしていきます。なかなかそうは思われないという正直な気持ちが出てくるなど、互いの間の話題が広がり、学習のなかで考えが進んでいきます。そのうち、磯部さんから「生きる」ということについて問いかけがされ、生徒がまたこれを考えるなかで、先生が磯部さんに「生い立ち記」を書いてもらおうとなります。これを題材として、生きる、生命というようなことまで考える授業が、展開されるのです。磯部さんの手記のなかで、磯

部さんは自分よりもっと重い障害をもった人のためにボランティア活動をしていることを知って、自分にしかできないことを探してきて、それをやるのが大事なのだなということが、討議のなかで出されてきます。それをまた磯部さんに出すということが繰り返されていきます。

この活動はその後も続いていきます。2年ほどたって、卒業して中学校に入った生徒たちが、小学校をたずねてきて、磯部さんとのメールを続けたいということになり、こんどは中学校の生徒と先生と磯部さんとの交流が始まります。やがて、磯部さんがこの小学校と中学校を訪れることも実現します。この交流はいまでも続いていて、4、5年をかけた、まことに感動的な実践です。

ここで大事なことは、教室の壁を越えて、しだいに世界が広がっていくことです。始めはホームページで、フィードバックに対するお返し、こちらからの問いかけというかたちでどんどん深まっていきます。世界が広がるということは、外国と交流するような意味もありますが、健常者と障害のある方との間の壁を越えて、世界が広がる。この論文はそういう新しい意味に気づかれ、そのことを示されている点が高く評価されたもので、どういうふう子どもが変わっていったかが分かる論文です。

このほか小学校では、つくば市の竹園東小学校での、自分自身のデジタルポートフォリオをつくって卒業記念とするとか、三重県鳥羽市の神島小学校での、インターネットを通して、自分たちの地域のよさを再確認するなどの、すぐれた実践がございました。

ネットワークというものが、情報を収集したり、編集したり、発信したり、それを使って交流したりして、子どもたちが物事を分かる、と同時にネットワークの先に人が居る、人と人との間で交流をしながら理解を広げて

いく、そのことの認識が深まっていることが分かります。そして、新しいコミュニケーションによる新しいネットワーク上の学習コミュニティというものが形成され、それを通して学習が進んでいるのだなということを感じた次第であります。

今回の論文では、実践を通して子どもの変容していく様子が見えてくるような論文が増えてきたと思います。理論だけであったり、実践の羅列であったりではなく、子どもがどう変わったのか、どんな学習効果があがったのかがよく分かる、そういう論文の増えたことは嬉しく思います。この賞のB部門は「コンピュータ活用部門」となっていますが、すでに現在でも、ネットワークとかWeb教材とかが含まれてきていますので、もっと広くICT、情報通信手段を活用した部門という名がふさわしいという方向にあるのかなということも思っております。よい論文を多数お寄せいただきましてありがとうございました。

(坂元 昂)

## 審査委員の所感の要約

(安齋省一)

ただ今、克明にまた審査の雰囲気も伝わるような講評がございましたので、感想だけを申し上げます。昨年度はどうも中学校が小学校に押され気味で、土俵がつまって厳しいなと思っておりましたが、今回は見事に押し返して、少し押しているかなと思っています。教育研究ということになりますと、どうしても小学校に比べ、中学校は少しどうかというふうに思っていました。東書教育賞に限っては中学校がたいへん健闘していると言えまして、たいへん頼もしく、また嬉しく思っております。

また、今回は校長先生の立場から研究、実践されたレポートが数編ございました。入賞には至らなかったものもありますが、おそらく他の校長先生がご覧になれば、大いに共感するところがあるであろう優れた内容の論文です。今後も校長先生のお立場からのご応募がいただければ嬉しいことでございます。

(杉山吉茂)

小学校の部門で最優秀賞を受賞された石川先生は、とてもお若いのですが、アイデアに富む点ですばらしい実践でした。といいましますのも、どうも最近の学生は頭がかたいように思われます。若いんだからもっと年寄りよりいいアイデアが出ないのかというのが。今日受賞された先生方の論文を拝見しますと、若い先生方のアイデアに富んだとてもいい実践が沢山あり、ああ、これなら日本は安心だなと感じました。特別賞の菊池校長先生の実践は、特別な環境下であったにしろ、校長先生が日ごろもっている姿勢が現れていてたいへん良かったと思いました。全体に総合学習というのもいいところがあることが分かりましたし、こういう良い実践が行われていることは頼もしいかぎりであります。

その一方で、数学教育に携わる者としては、数学や理科で良いものが出てこないことを残念に思います。数学や理科の学力の国際調査で、8年ほど前の調査では、シンガポール、韓国に次いで日本が3位でした。このとき4年生だった生徒が中学生になったときに、もう一度調査をしました。すると相変わらずシンガポールが1位、韓国が2位でしたが、そのあとホンコンと台湾が入って、日本は5位でした。シンガポールは20年ほど前には、人件費がとても安くて、日本から工場がどんどん進出していきました。その国が理科教育や数学教育を改革して、工業化を進めて、高賃金になって、今ではトップレベルの工業国です。もう工賃が安いからシンガポールに進出するなどということは考えられなくなって、日本の工場も撤退しています。ところが最近、日本から最先端の工場はシンガポールにもっていくという。それは日本よりシンガポールの人材のほうがすぐれているからだという事です。

日本の教育のために、もっと科学教育のほかも振興してほしいと願っています。先生方のような実践が、理科や数学にも行われていくことを心から望みます。

(高桑康雄)

審査にたずさわって日は浅いのですが、今回はたいへん優れた実践が多く、レベルが高かったと感じております。とくに感心したのは、じつにいろいろなものが教材、教具として生かされていることです。最優秀賞の石川先生の場合も、黒板とチョークといういわば基本的なところから始まって、子どもたちの身の回りの物が教材として生かされていくということが分かりました。また、優秀賞の馬場先生の場合も、やはり身の回りの川の風景が教材になっています。一方ではITがどんどん使われている。今の学校では、昔ながらのメディア教材から最先端のメディアま

でが同時に使われる可能性がある。考えられるいろいろなメディアをどう生かすか、それは先生方の創意工夫と意欲にかかっていると、思います。そういう面での努力がよく分かりました。

もう一つ、実践性そして子どもたちにどのような成果が見られたのかという点が審査の基本であります。だれかの、なにかの理論をひいてきて、それを枕にして、その枕が高すぎて、実際にやっていることはそれほどではないというようなものでなく、本当に日ごろのなかから力を生み出していらっしゃるということもよく分かりました。

(三上裕三)

小学校の部の最優秀賞の石川先生は、お若くて、教職につかれてまだ数年というところでしょうか、これまでの受賞者のなかでも最年少のほうではないかと思ひます。今子どもたちに接して、さまざまな生活上の問題があります。それらを簡単にいうと、食べる、寝る、遊ぶことにかかわっています。これが今日乱れていて、そこからいろいろな問題が発生してきていると思ひます。石川先生もそこに着目して、4年生を対象に実に分かりやすく、さまざまな実験とか、工夫をこらして授業をされている。これは全国の養護の先生方にたいへん参考になるレポートだと思ひますし、積極的に挑戦されたことに心から敬意を表します。

優秀賞の馬場先生の図工の指導ですが、先生自身がたいそう柔らかで豊かな発想の持ち主であることが、論文のなかに表れています。さらに他教科との関連もよく踏まえた実践であり、これからも発展性のあるところみであります。

仙田先生の社会科の研究ですが、日韓の歴史といひますと、敏感に反応する部分があるだけに、敬遠しがちな教材ですが、積極的に、客観的な資料をもとに、子どもたちに分かり

やすく展開されていてすばらしいものです。

とくに先生の熱意がたいへんなもので、韓国に、何回も行かれて、韓国の先生とも交流を重ねるといふ、そうしたことが全て、生徒のほうにも反映されているのではないかと思ひます。

それから今回は、校長先生の論文が2編残りましたが、学校経営の立場からの校長先生の論文があがってくるというのは本当に良いことです。北海道豊浦小学校の菊池先生の場合は、とくに校長先生の経営方針である「人間遊合楽習構想」の下で、これは子どもたちが中心にならなければ生かされない。そういう思いで実践されている。本当に心あたまる実践報告でありました。

(赤堀侃司)

小学校では総合的学習というテーマが多くなったのですが、この総合的学習も昨今はいろいろ議論されています。これでいいのかという声もきかれます。私も総合的学習で身につけるべきものをぜひ明確にする必要があるのだろうと考えております。論文のなかの一つに、小学校での卒業研究であると生徒にきちんと位置づけて研究させていくというものがありましたが、これなどは感心いたしました。大学でいえば卒業研究にあたるものは、生半可なことではだめです。何日も一生懸命にやるその積み上げが大切です。こういう位置づけをしないと、本物の力にはならないのではないかという気がします。そういうことを小学生がやっている。いろんなデータをまとめてCD-ROMにしている。これはまったく大学生と同じことで、感心したわけです。たんに論文だけでなく、電子メディアの媒体にしなければ、他の人に活用できないだろうと、するとそれが生かされてくる。次年度の生徒たちがさらに充実させていく、ということが可能となるといふメディアの使い方が、すぐれていると思ひました。

中学校は教科中心ですが、情報活用では問題があります。ここでもそうしたことをあげられています。たとえば、検索でも実際にインターネットでやりますと、いろいろな問題が出ます。まあ時間がかかる。どういうキーワードを入れればよいのか分からない。さらに得られたデータの信憑性はどこにあるのか分からない。この先生の場合、そういうことをきちんと抑えている。そのために、いろいろなリンク集やら、先生が推奨したサイトからまず入らせるとかの指導方法をとられている。このことは検索にともなう問題を解決されたことですから、この知見を皆が共有できるという、たいへん重要なことであると思います。どうか今回の論文に示された知見を、ひろく全国の先生方にも知っていただいて、参考にしていただきたいと思います。

(堀口秀嗣)

昨今 ICT という耳慣れないことばが出てまいります。4年ほど前からユネスコとか OECD とかの国際機関では、IT ではなくて ICT ということばを使うようになっております。Information and Communication Technology というのですが、情報はやりとりされて初めて価値を生み出すのだという、

そういうところに次第に視点が移ってきているように思います。わが国でも、2005年にはすべての教室にインターネットが接続された状態で、情報伝達手段が配置されることになっています。こうした状況の下では、おそらくコンピュータやインターネットを使った活動は進んでいくと思われませんが、論文を拝見していても、足りない方向性としては、情報通信手段によって子どもたちの能力がアップ、パワーアップになっているかということ、実証的というか具体的に明らかにしていく論文が出てきたら、これは本物でしょうと、そのような感じがします。それを明らかにするためには、学習に取り組む前に、どういう力であったのかを調べておかななくてはなりません。

そして、活動の結果として、例えばホームページを作るにしても、表現の仕方がこんなふうに変ってきているというようなところを具体的に示していただけると、他の学校でもそれを参考として、子どもたちの力をつけていくことができるのではないかと考えます。コンピュータの活用だけでなく、どんな力がついたのか、パワーアップを伝えていくことが大事であると思います。

